

JD Edwards EnterpriseOne Tools

One View管理ガイド

リリース9.1.x

E60434-01

2014年12月

Copyright © 2012, 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1. 対象読者	7
2. ドキュメントのアクセシビリティ	7
3. 関連ドキュメント	7
4. 表記規則	7
I. One View Reporting管理	9
1. One View Reporting について	11
1.1. Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne	11
1.2. One View Reportingの概要	12
2. One View Reportingのインストールおよび構成	13
2.1. Oracle BI Publisherのインストール	13
2.1.1. Oracle BI Publisherのインストールの概要	13
2.1.2. 事前設定	14
2.1.3. Oracle BI Publisherのインストール	15
2.1.4. 新規バージョンのOracle BI Publisherへのユーザーの移行(リリース 9.1更新3.3)	17
2.2. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインストー ル	17
2.3. ボイラープレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与	18
2.4. BI Publisherユーザーの構成	19
2.5. One Viewレポートの概要および管理	20
2.6. One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認	21
2.6.1. ソフトコード値のガイドライン	22
2.6.1.1. HTTPアドレス	22
2.6.1.2. ユーザー名	22
2.6.1.3. <code> _BI_PASSWORD_ </code>	22
2.7. One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成	23
2.7.1. 概要	23
2.7.2. ソフトコード・レコードの作成	25
2.7.3. ソフトコード値のガイドライン	26
2.7.3.1. HTTPアドレス	26
2.7.3.2. ユーザー名	26
2.7.3.3. <code> _BI_PASSWORD_ </code>	26
2.8. One View Reporting機能権限の設定	26
2.8.1. ランタイム機能定義の確認	26
2.8.2. 機能権限の設定	27
2.8.3. ユーザー別または環境別の機能権限のコピー	28
2.9. BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピン グ	28

2.10. One Viewレポートのインストール	29
2.11. 構成設定の処理	30
2.12. HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項	31
3. One Viewレポートの処理	33
3.1. One Viewレポートについて	33
3.1.1. One Viewレポートの処理	33
3.2. One Viewレポートのクエリー	34
3.3. One Viewレポートのプロモート	34
3.4. One Viewレポートのプロモーション履歴の確認	35
3.5. One Viewレポートの削除	35
3.6. One Viewレポートのエクスポート	35
3.7. One Viewレポートのインポート	36
3.8. One Viewレポートの転送	37
4. 管理タスク	39
4.1. One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所	39
4.2. 言語サポート	39
4.3. トラブルシューティング	40
4.3.1. 「One View」メニューがアプリケーションに表示されない	40
4.3.2. 「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない	41
4.3.3. 「One View」メニューはロードしているがレポートが表示されない	41
4.3.4. レポートの保存時にエラーが発生する	41
4.3.5. BIレイアウト・エディタですべてのレポートについてエラーが発生する	42
4.3.6. 「レポートを保存できませんでした」というエラーが発生する、または共有レポートの実行中に問題が発生する	42
4.3.7. BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラープレートがない	42
4.3.8. One Viewレポートのインポート中のバージョン不一致エラー	43
4.3.9. レポートが最大レコード数を越えた旨の警告(リリース9.1更新5)	44
4.4. パフォーマンスに関する考慮事項	44
4.5. スケーラビリティに関する考慮事項	45
II. One Viewウォッチリスト管理(リリース9.1更新3)	47
5. One Viewウォッチリスト・セキュリティの設定	49
5.1. ウォッチリスト・セキュリティの概要	49
5.2. ウォッチリスト表示セキュリティの設定	49
5.3. ウォッチリスト操作セキュリティの設定	50
6. One Viewウォッチリストの管理タスク	53
6.1. トラブルシューティング	53
6.1.1. ウォッチリストが実行されない	53
6.1.2. 「更新に失敗しました - クエリーが見つかりません」エラー	54
6.1.3. ユーザーにウォッチリストへのアクセス権がない	55
6.2. パフォーマンスに関する考慮事項	55
用語集	57

索引 59

まえがき

『JD Edwards EnterpriseOne Tools One View管理ガイド』へようこそ。

注意:

このガイドはJD Edwards EnterpriseOne Toolsリリース9.1更新3および9.1更新5に対して更新されています。ドキュメントの更新の詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Tools Net Change for Tools Documentation Library』を参照してください。

1. 対象読者

このガイドは、One View Reportsのインストールおよび構成を担当するシステム管理者と技術コンサルタント、ならびにOne Viewウォッチリスト管理を担当するユーザーを対象としています。

2. ドキュメントのアクセシビリティ

オラクル社のアクセシビリティへの取組みの詳細は、Oracle Accessibility ProgramのWebサイト (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracleサポートへのアクセス

Oracleのお客様は、My Oracle Supportにアクセスして電子サポートを受けることができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>、聴覚に障害があるお客様は<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>を参照してください。

3. 関連ドキュメント

関連ドキュメントには、My Oracle SupportにあるJD Edwards EnterpriseOneリリース・ドキュメント概要の各ページからアクセスできます。メインのドキュメント概要ページには、ドキュメントID(876932.1)を検索するか、次のリンクを使用してアクセスしてください。

<https://support.oracle.com/CSP/main/article?cmd=show&type=NOT&id=876932.1>

My Oracle Supportホームページからこのページに移動するには、「ナレッジ」タブをクリックした後、「ツールとトレーニング」メニュー、「JD Edwards EnterpriseOne」、「Welcome Center」、リリース情報の概要の順にクリックします。

このガイドでは、構成ファイル(jde.ini、jas.ini、jdbj.ini、jdelog.propertiesなど)に格納されるサーバー構成設定に触れています。JD Edwards EnterpriseOne Toolsリリース8.97以降、サポートされているサーバー・タイプの設定にアクセスして管理する際には、必ずServer Managerプログラムを使用することを強くお勧めします。

4. 表記規則

このドキュメントでは、次の表記規則を使用します。

表記規則	説明
太字	フィールド値を示します。
イタリック体	強調箇所と、JD Edwards EnterpriseOneまたはその他のマニュアルなどのタイトルを示します。
固定幅フォント	JD Edwards EnterpriseOneプログラム、その他のサンプル・コード、またはURLを示します。
> チュートリアル	説明されている機能の動画へのリンクを示します。この動画はMP4形式のため、対応するプレーヤをインストールしておいてください。この動画にアクセスするには有効なOracleアカウントが必要です。

パート I. One View Reporting管理

JD Edwards EnterpriseOne One View Reportingによって既存のレポートを実行したり、テーブル、グラフおよびチャートを含む新しいレポートを作成して、PDFドキュメント、HTML、Excelスプレッドシートなどの様々な形式で表示したりすることが簡単にできます。また、多くのレポートでレポート・データを対話的にフィルタ処理してさらに分析を行うことが可能です。

構成は次のとおりです。

- [11 ページの1章One View Reportingについて](#)
- [13 ページの2章One View Reportingのインストールおよび構成](#)
- [33 ページの3章One Viewレポートの処理](#)
- [39 ページの4章管理タスク](#)

One View Reportingについて

この章の内容は次のとおりです。

- 11 ページの [Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne](#)
- 12 ページの [One View Reportingの概要](#)

1.1. Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne

JD Edwards EnterpriseOneには、Oracle Business Intelligence (BI) Publisherとの統合が3種類用意されています。各統合は特定のレポート要件に対応しています。それは、顧客向けのドキュメントを生成すること、エンドユーザーが独自の業務レポートを作成できるようにすること、パワー・ユーザーおよびITスタッフが複雑なアドホック・レポートを作成できるようにすることです。この項では、各統合の概要とそれぞれの一般的な使用例を示します。

- **JD Edwards EnterpriseOne用の組込みBI Publisher:** UBEの出力を顧客向けのドキュメントに変換します (Pixel Perfect)。JD Edwards EnterpriseOne用の組込みBI Publisherの一般的な使用例には、請求書、計算書、ピッキング・リスト、小切手などがあります。

詳細は、『*JD Edwards EnterpriseOne Tools BI Publisher for JD Edwards EnterpriseOne Guide*』を参照してください。

- **One View Reporting:** エンドユーザーがカスタマイズされたレポートの作成および実行をJD Edwards EnterpriseOneの対話型アプリケーションから直接行えるようにします。これらのレポートは一般に、ユーザーまたはロール固有であり、ユーザーが通常業務の一環として毎日、毎週のように定期的に行うものです。この種のレポートでは、データ選択、順序、含めるデータ・カラム、およびデータ視覚化 (チャート、テーブル、グラフ) に関して高度なカスタマイズが必要になります。これらのエンドユーザー・レポートを使用すると、日々の標準的なビジネス・プロセスの一部である業務データの可視性が高まるため、ユーザーの生産性が向上します。One View Reportingにより、ユーザーはJD Edwards EnterpriseOneアプリケーションの内部からデータ・フィールドを選択して特定のデータ選択を実行し、BI Publisher内のレイアウト機能を活用してレポート出力のフォーマットを定義することができます。一般的な使用例には、売上レポート、顧客レポート、仕入先レポート、従業員レポートなどがあります。このガイドでは、One View Reporting統合のインストール、構成および管理タスクと使用例について説明します。
- **アドホック・レポート:** パワー・ユーザーやITスタッフが強力なクエリーを作成して、随時データを照会できるようにします。この種のレポートは、通常のビジネス・プロセスの範囲を外れた特殊なビジネス要件を満たすために作成するのが一般的であり、1、2回しか実行されません。一般に、これらのレポートではユーザーがSQL文を作成してデータを取得する必要があります (クエリー・ビルダー)。クエリーは通常、JD Edwards EnterpriseOneのデータ・スキーマを理解しているIT部門またはパワー・ユーザーが作成します。クエリーの作成後、IT部門またはパワー・ユーザー

ザーはデータ表示用のテーブルやチャートを含めたレポート・レイアウトを作成します(テンプレート・ビルダー)。この統合は、JD Edwards EnterpriseOne JDBCドライバとOracle BI Publisher Enterprise Editionを利用しています。この統合は一般に「対話型レポート」と呼ばれています。当然ながら、一般的な使用例はありません。

1.2. One View Reportingの概要

オラクル社のJD Edwards EnterpriseOne One View Reportingは、Oracle BI Publisherでデータにアクセスしてレポートを生成するための直観的で使いやすい方法を提供します。

既存のレポートを実行したり、テーブル、グラフおよびチャートを含む新しいレポートを作成して、PDFドキュメント、HTML、Excelスプレッドシートなどの様々な形式で表示したりすることが簡単にできます。また、多くのレポートでレポート・データを対話的にフィルタ処理してさらに分析を行うことが可能です。

One View Reportingでは、標準およびカスタムの検索/表示フォームを使用してレポート・データを検索できます。リリース9.1では、結合ビジネス・ビューを使用して複数のテーブルのレコードにアクセスするOne Viewアプリケーションも導入されています。One Viewの検索/表示フォームでは、商取引データとマスター・データがこれまででない組合せで結び付けられます。このデータの組合せは、ユーザーが選択したBI Publisherレイアウトで表示可能です。データ・ブラウザを使用してレポート・データを検索し、One Viewレポートを生成することもできます。

One View Reportingには次のような利点があります。

- ほとんどのレポート・ニーズに対するITサポートが不要になるため、レポートの開発および管理のコストが削減されます。
- サードパーティのレポート製品が不要になるため、総保有コストが削減されます。
- 簡単かつリアルタイムに情報にアクセスできるため、エンドユーザーの満足度が向上します。
- 情報への低コストのアクセスが実現するため、ビジネス上の意思決定が可能になります。
- データ表示やレポート生成に必要なカスタム・アプリケーションが減少する、または不要になるため、システム・アップグレードのコストが削減されます。

One View Reportingのインストールおよび構成

この章の内容は次のとおりです。

- 13 ページの「Oracle BI Publisherのインストール」
- 17 ページの「BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインストール」
- 18 ページの「ボイラープレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与」
- 19 ページの「BI Publisherユーザーの構成」
- 20 ページの「One Viewレポートの概要および管理」
- 21 ページの「One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認」
- 23 ページの「One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成」
- 26 ページの「One View Reporting機能権限の設定」
- 28 ページの「BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング」
- 29 ページの「One Viewレポートのインストール」
- 30 ページの「構成設定の処理」
- 31 ページの「HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項」

2.1. Oracle BI Publisherのインストール

この項では、Oracle Business Intelligence (BI) Publisherのインストールの概要、事前設定、および Oracle BI Publisher 11gのインストール方法について説明します。新しい「One View Reporting」ソリューションは、JD Edwards EnterpriseOneの対話型アプリケーションをBI Publisherの対話型レイアウト・エディタと統合し、エンドユーザー向けの使いやすいレポート・ソリューションを生み出します。

2.1.1. Oracle BI Publisherのインストールの概要

Oracle BI Publisherは、あらゆるレポートやドキュメントの作成、管理および配布を従来のレポート・ツールより簡単かつ迅速に行うことのできるレポート・ソリューションです。

One View Reporting用には、Oracle BI Publisherをインストールするだけです。Oracle Business Intelligence Enterprise EditionやOracle Real-Time Decisionsをインストールする必要はありません。

BI PublisherとともにWebLogicもインストールされるため、WebLogicをあらかじめインストールしておく必要はありません。WebLogicのデフォルト・ドメインはBI Publisherに対して機能するため、ドメインを区別しないのであれば、追加ドメインの作成は必要ありません。

2.1.2. 事前設定

この項で説明されているタスクを実行するには、事前に次の作業を行う必要があります。

- JD Edwards EnterpriseOne Applicationsリリース9.1のインストール。
- JD Edwards EnterpriseOne One View Reportingの証明書の確認。ドキュメント745831.1 (JD Edwards EnterpriseOne Minimum Technical Requirements Reference)をMy Oracle Supportで参照してください。

<https://support.oracle.com/epmos/faces/DocumentDisplay?id=745831.1>

- サポートされているデータベースのインストールと構成。

サポートされているデータベースの最新情報は、次のURLでOracle Fusion Middlewareの動作保証に関するドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>

Oracle Fusion Middleware 11gリリース1証明書の製品エリアを探して、Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition 11gR1 (11.1.1.3.0-11.1.1.6.0)のシステム要件およびサポートされるプラットフォームに関する記述(xls)にアクセスしてください。

- データベースをインストールしたら、*Oracle Fusion Middleware 11gリリース1 (11.1.1.x)*のシステム要件と仕様に関するドキュメントのリポジトリ作成ユーティリティ(RCU)の要件に関する項を参照して、データベースが正しく構成されていることを確認してください。

http://docs.oracle.com/html/E18558_01/fusion_requirements.htm#CHDJGECA

次の場所でドキュメントにアクセスすることもできます。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-requirements-100147.html>

- Oracle Software Delivery CloudからOracle BI Publisherをダウンロードします。

<https://edelivery.oracle.com>

「製品パック」フィールドでOracle Business Intelligenceを選択して、対応するプラットフォームを選択します。

- Oracle Repository Utility (RCU)を、Oracle Technology Network (OTN)のOracle Business Intelligence (11.1.1.x)のダウンロード・ページからダウンロードします。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-enterprise-edition/downloads/bi-downloads-1923016.html>

RCUのバージョンは、BI Publisherのバージョンと一致している必要があります。

- ポップアップを許可するようブラウザを構成します。
- Adobe Flashビューアがインストール済であることを確認します。

2.1.3. Oracle BI Publisherのインストール

デフォルト設定(ポートやセキュリティ・ログインなど)を変更する予定がない場合は、『Oracle Business Intelligenceクイック・インストール・ガイド』に従ってインストールを実行します。デフォルト設定を一部変更する場合は、『Oracle Business Intelligenceインストール・ガイド』に従います。Oracle BIのインストール・パッケージには次の製品が収録されていて、これら製品のインストール、構成および実行に必要なテクノロジーもすべて揃っていますが、インストールが必要なのはOracle Business Intelligence Publisherのみであることに注意してください。

- Oracle Business Intelligence Publisher
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (Oracle BI Answers、Oracle BI Interactive Dashboards、Oracle BI Delivers、Oracle BI Administration Tool、Oracle BI Add-in for Microsoft OfficeおよびOracle BI Publisher) (オプション)
- Oracle Real-Time Decisions (オプション)
- Essbase Suite (オプション)

Oracle BI Publisher 11g(11.1.1.7)はWebLogic Server 10.3.5.0およびOracle JDK 1.6.0_35とパッケージ化されています。

重要:

One View Reporting用には、Oracle BI Publisherをインストールするだけです。

次の手順は、インストール方法を簡単にまとめたものです。この手順を最初に確認し、詳細な手順についてはインストール・ガイドの『Oracle Business Intelligenceクイック・インストール・ガイド』を、またはデフォルト設定を一部変更する場合は『Oracle Business Intelligenceインストール・ガイド』を使用してください。

注意:

以前のリリースで現在稼働中の場合も、BI Publisher 11.1.1.7の新規インストールをお勧めします。これによって、最新リリースに切り替える前に並列テストを実行できるようになります。

Oracle BI Publisherをインストールする手順は次のとおりです。

1. Oracle Repository Utility (RCU)を起動してBI Publisherスキーマを作成します。(BIPLATFORMおよびMDS。)

詳細は、『Oracle Business Intelligenceクイック・インストール・ガイド』を参照してください。

2. スキーマを作成したら、Oracle Business Intelligenceインストーラを起動します。

注意:

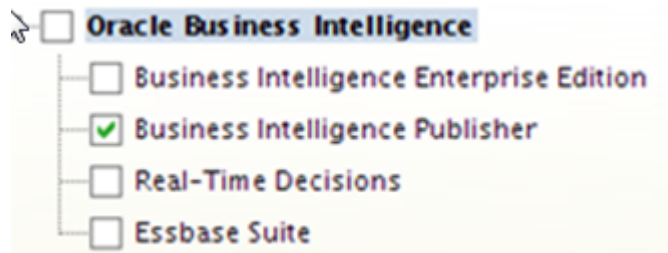
- 特殊文字を含むユーザーIDを使用してソフトウェアをインストールしないでください。
 - BI PublisherとHTMLサーバーは、双方向のWebサービスとHTTP通信を確保するために、同じファイアウォールの内側に配置する必要があります。
 - インストール中のマシンでウィルス対策ソフトウェアが稼働している場合、インストール・プロセスの時間は長くなる可能性があります。
-

3. 該当するインストール・タイプを選択します。
 - 「簡易インストール」では、Oracle Business Intelligenceのコンポーネントが、デフォルトの設定を使用して、1台のコンピュータに最低限の手順でインストールされます。管理対象サーバーはインストールされません。このインストールはデモンストレーション、評価または概念実証の使用例を対象としています。
 - 「エンタープライズ・インストール」では、選択したOracle Business Intelligenceコンポーネントがインストールされ、指定したMiddlewareホーム、OracleデータソースおよびWebLogic Serverホームに関連付けられます。エンタープライズ・インストール・タイプでは個別の管理対象サーバー、bi_server1が管理サーバーとともに作成されます。以前のバージョンのBI Publisherがインストールされている場合も、このインストール・タイプを使用してください。

このインストール・タイプは本番環境にお勧めします。

 - 「ソフトウェアのみインストール」では、後の構成のために既存のMiddlewareホームにソフトウェア・バイナリ・ファイルがインストールされます。
4. Oracle Business Intelligenceコンポーネントのインストール画面が表示されたら、「Business Intelligence Publisher」オプションのみを選択します。

図2.1 Business Intelligence Publisherのインストール画面



注意:

Oracle BI Publisherのインストール手順の詳細は、『Oracle Business Intelligenceクイック・インストール・ガイド』を参照してください。

5. インストールおよび構成が終了したら、WebLogic管理コンソールおよびBI Serverにサインインし、次のURLを使用してサーバー稼働していることを確認します。

<http://host:port/console> (WebLogic管理コンソール)

<http://host:9704/xmlpservlet> (BI Publisherログイン・ページ、ポート9704は「エンタープライズ・インストール」タイプのデフォルト・ポート)

6. その他の更新または追加要件の証明書を confirms します。

EnterpriseOne HTMLサーバーとOracle BI Publisherサーバー間のSSL接続を構成するには、『JD Edwards EnterpriseOne Tools Security Administration Guide』のOne View Reportingに対するEnterpriseOne HTMLサーバーとOracle BI Publisherサーバー間のSSL接続の構成に関する項を参照してください。

2.1.4. 新規バージョンのOracle BI Publisherへのユーザーの移行（リリース9.1更新3.3）

Oracle BI Publisherのバージョンを前のバージョンからアップグレードする場合（例: Oracle BI Publisher 11.1.1.5から11.1.1.7へのアップグレード）、インストール後に、WebLogicユーザーを既存バージョンから新規サーバーへ移行する必要があります。

ユーザーを新規バージョンのOracle BI Publisherに移行するには、次のようにします。

1. ユーザー情報を既存BIサーバーからエクスポートします。
 - a. BI Publisher WebLogic管理コンソールにログオンします。
 - b. 「セキュリティ・レルム」を選択します。
 - c. 「移行」タブから「エクスポート」を選択します。
 - d. エクスポート・ファイルの場所を入力します。
 - e. 「保存」をクリックします。
2. ユーザー情報を新規サーバーにインポートします。
 - a. BI Publisher WebLogic管理コンソールにログオンします。
 - b. 「セキュリティ・レルム」を選択します。
 - c. 「移行」タブから「インポート」を選択します。
 - d. エクスポートされたファイルの場所を入力します。
 - e. 「保存」をクリックします。
3. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneレポートをダウンロードしてインポートします。

注意:

前のバージョンのBI Publisherでの既存レポートは正常に実行されません。手動で新規バージョンに変換する必要があります。

個人用レポートの場合は、既存レポートを選択して、「レポート定義」タブで「保存」、「別名保存」、「コピー」、「プロモート」または「同期」オプションを使用するとこの作業が行われます。

共有レポートの場合は、既存レポートを選択して、「レポート定義」タブで「コピー」、「予約」および「同期」オプションを使用するとこの作業が行われます。

詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Reportingユーザー・ガイド』の10進数フォーマット機能の有効化に関する項を参照してください。

4. JD Edwards EnterpriseOneボイラープレート・テンプレートをアップロードします。

2.2. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインストール

JD Edwards EnterpriseOneレポート・レイアウトの作成にはテンプレート・ファイルを使用します。BI Publisherが完全にインストールされたら、JD Edwardsで作成されたボイラープレート・テンプレートをインストールできます。これらのテンプレートはOne Viewレポートの実行に必須のものではありませんが、提供されているOne Viewレポートとの間でルック・アンド・フィールの一貫性を保つために使用することをお勧めします。

BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレート・テンプレートをインストールするには、次の手順に従います。

1. My Oracle SupportのUpdate CenterからOne View Boilerplatesコンポーネント(JDE_Boilerplates.zip)をダウンロードします。

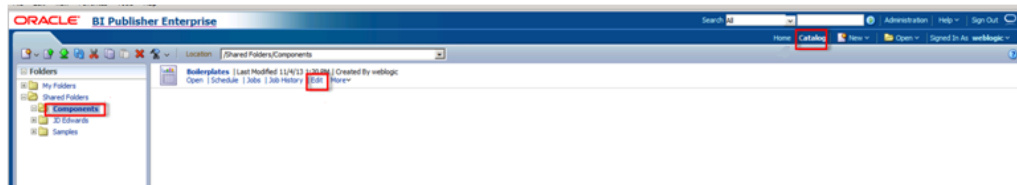
<https://updatecenter.oracle.com/>

2. 解凍プログラムを使用してJDE_Boilerplates.zipファイルから4つの.xptファイルを抽出し、それらをハード・ドライブに保存します。
3. 管理者権限でBI Publisherにログインし、カタログに移動します。
4. 「フォルダ」ペインで、「共有フォルダ」ディレクトリ、「コンポーネント」フォルダの順に開きます。

注意:

OBIEEおよびBI Publisherの両方を同じサーバー上にインストールした場合、「コンポーネント」フォルダおよびボイラープレート機能が表示されない場合があります。これを解決するには、「[42 ページの BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラープレートがない](#)」を参照してください。

5. ボイラープレート・レポートを見つけて、「編集」を選択します。



6. 画面の右上隅にある「新規レイアウトの追加」を選択します。
7. 「アップロード」を選択し、プロンプトが表示されたら、ハード・ドライブに格納されたEnterpriseOneボイラープレート・テンプレート・ファイル(.xptファイル)を選択します。
8. テンプレートの名前を指定し、タイプとして「BI Publisherテンプレート」を、ロケールとして「英語」を選択します。
9. 「アップロード」を選択してテンプレートを保存します。
10. 前述の手順を繰り返して、残りのEnterpriseOneテンプレート・ファイルを追加します。

注意:

ボイラープレート・レポートに追加したBI Publisherテンプレート(.xptファイル)は、共有テンプレートとしてすべてのユーザーに表示されます。

2.3. ボイラープレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与

ボイラープレートがアップロードされたら、BIAuthorロールを持つすべてのユーザーがボイラープレートにアクセスできることを確認する必要があります。ユーザー固有の設定に応じて、他のロールを対象ユーザーに割り当てる場合もあります。BIAuthorロールのみが必須です。

BIAuthorロールのアクセス権限をボイラープレートに付与するには、次の手順に従います。

1. 管理者権限でBI Publisherにログインし、カタログに移動します。
2. 「共有フォルダ」ディレクトリで「コンポーネント」フォルダを開きます。

3. 「詳細」ドロップダウン・メニュー、「権限」の順に選択します。
4. 「+」記号(作成)、「検索」ボタンの順に選択します。
5. BIAuthorロールを追加し、「OK」をクリックします。
6. BIAuthorロールのチェックボックスをすべて選択し、「OK」をクリックします。

注意:

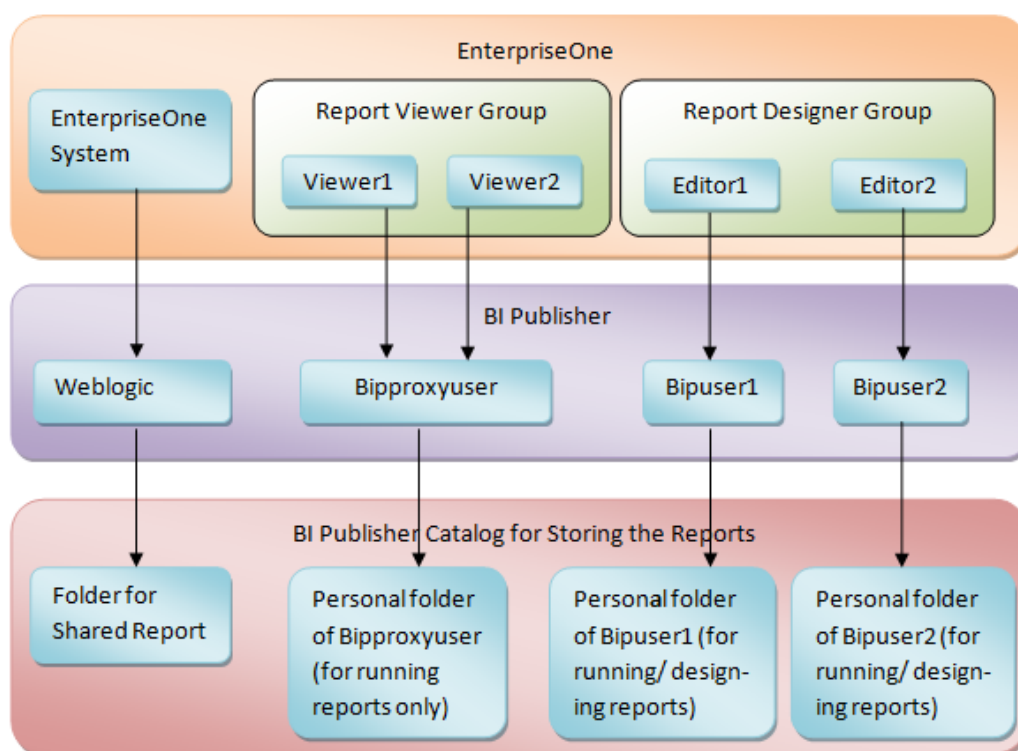
システム管理者として、ボイラープレートを削除する権限をユーザーに付与するかどうかを判断する必要があります。

2.4. BI Publisherユーザーの構成

BI Publisherユーザーを構成する際、One Viewレポートを設計または作成するJD Edwards EnterpriseOneユーザーごとにBI Publisherユーザーを作成する必要があります。レポートを実行するのみで、レポートの作成を行わないすべてのJD Edwards EnterpriseOneユーザーに対して、BI Publisherでプロキシ・ユーザーを1つ設定することもできます。これにより、必要な設定作業の量が最小限に抑えられます。ただし、監査の目的で各ユーザーを個別に追跡する場合は、JD Edwards EnterpriseOneユーザーごとにBI Publisherユーザーを設定し、1対1の関係を作成してください。

次の図に、2つのユーザー・タイプとそのBI Publisherでの構成方法を示します。

図2.2 JD Edwards EnterpriseOneおよびBI Publisherでのユーザー設定



BI Publisherユーザーを構成するには、次の手順に従います。

1. WebLogic Server管理コンソールにログインします。

- 「セキュリティ・レルム」、「myrealm」の順に移動します。
- 「ユーザーとグループ」タブを選択し、「新規」をクリックします。
- 名前、説明およびパスワードを指定してから「OK」をクリックして、新規BIPアカウントを作成します。

注意:

特殊文字が含まれるBIPアカウント名またはパスワードは使用しないでください。

- 新規作成したユーザーをBIAuthorグループに追加するには、次のようにします。
 - 新規作成したユーザーを検索して選択します。
 - 「グループ」タブに移動します。
 - BIAuthorグループを選択して「選択済み」の下に移動します。
 - 「保存」をクリックします。

注意:

すべてのBI PublisherユーザーがBIAuthorグループに属している必要があります。

- 「保存」をクリックします。
- 新しいユーザー情報を使用してOracle BI Publisherサーバーにログオンできることを確認します。

詳細は、『Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Publisher 管理者ガイド』を参照してください。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

各JD Edwards EnterpriseOneユーザーから対応するBI Publisherユーザーへのマッピングを設定する必要があります。これについては、この章の「[28 ページの BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング](#)」で説明しています。

注意:

すべてのBI PublisherユーザーがWebLogic Server管理コンソールで作成された後、最後の手順の提案どおりに各ユーザーでOracle BI Publisherサーバーにログオンするか、BI Publisherサーバーを再起動する必要があります。このいずれかを実行することで、これらのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneから接続できるようになります。

2.5. One Viewレポートの概要および管理

One Viewレポートは軽量のオブジェクトとして管理されます。そのライフサイクル全体にわたってオブジェクト管理ワークベンチを経由するわけではありません。

各One Viewレポートは次のコンポーネントで構成されます。

- データ・モデル・ファイル。
- レポート・テンプレート・ファイル。(このファイルは、データ・モデル・ファイルと同じ名前です。)

これらのファイルはいずれもBI Publisherサーバーに格納されます。

BI Publisherサーバーでは、これらのレポートはパス・コード別に整理されます。たとえば、DV910パス・コードのOne View作業照会アプリケーション(P51220)で作成された個人用レポートは、(環境に関係なく)/BIP_user_id/DV910/P51200/というBI Publisherフォルダに格納されます。

PY900パス・コードの同じアプリケーションに対するパブリック・レポートは、/Shared Folder/PY910/P51200/に格納されます。

インポート、エクスポートまたは転送の機能を使用すれば、レポートの移動が可能です。任意のレポートを任意のパス・コードからzipファイルにエクスポートできます。次に、そのレポートを任意のパス・コードにインポートできます。転送機能を使用すると、あるパス・コードから別のパス・コードにレポートを転送できます。ただし、ソース・パス・コードとターゲット・パス・コードがソフトコード・アプリケーションを通じて同じBI Publisherサーバーをポイントしている必要があります。

ソフトコード・アプリケーションでは、ソフトコード・レコードがパス・コード・レベルではなく環境レベルで処理されることに注意してください。特定のパス・コードについて、すべての環境に対してソフトコード・レコードを設定する必要があります。

ユーザーがJD Edwards EnterpriseOneの特定の環境にログインすると、ログイン環境とユーザー資格証明のソフトコード・レコードを使用して、ソフトコード・レコードが参照されます。ソフトコード・レコードは、接続先のBI Publisherサーバーと、BI Publisherサーバーへの接続に必要なユーザーIDおよびパスワードを示します。ソフトコード・レコードがBI PublisherサーバーBIP_Aであると仮定します。ユーザーがレポートを作成する場合、レポートはBIP_Aサーバー上に格納されます。ユーザーがレポートを実行する場合、システムはBIP_Aサーバーに接続してレポートを実行します。ユーザーがエクスポートを実行する場合、エクスポートはBIP_Aサーバーから行われます。ユーザーがBI Publisherレポートをインポートする場合、BI PublisherレポートはBIP_Aサーバーにアップロードされます。ユーザーがログイン・パス・コードからターゲット・パス・コードにレポートを転送する場合、レポートはBIP_Aのログイン・パス・コード・フォルダから同じサーバーであるBIP_Aのターゲット・パス・コード・フォルダにコピーされます。

別のBI Publisherサーバー(BIP_Bなど)にレポートを転送する場合は、まず、ソフトコード・レコードがBIP_Aをポイントしているユーザーおよび環境としてログインして、レポートをエクスポートする必要があります。次に、ログアウトして、ソフトコード・レコードがBIP_Bをポイントしている別のユーザーおよび環境としてログインしなおす必要があります。その後、レポートをインポートします。BIP_Bサーバーにレポートがアップロードされて、事実上、BIP_AからBIP_Bにレポートをコピーするタスクが実行されたことになります。

2.6. One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認

ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ソフトコード管理」、「ソフトコード・テンプレート」の順に選択して、Webサービス・ソフトコード・テンプレート・アプリケーション(P953000)にアクセスします。P953000を使用して、One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートが次の値とともに存在することを確認します。

フィールド	値
テンプレート名	JDE_ONEVIEW_CONNECTION
記述	One View Reporting Connection Template
ソフトコード・キー	ONEVIEW_BIP_CONN 重要: ソフトコード・キーの値はONEVIEW_BIP_CONNである必要があります。このフィールドには他の値は使用できません。
値	<pre><webservice> <endpoint>http://bip_server:bip_port</endpoint> <username>bip_user_name</username> <password>_ _BIP_PASSWORD_ _</password> <properties> <property><name>root catalog</name><value>JD Edwards</value></property> <property><name>bip version</name><value>11.1.1.7.0</value></property> </properties> </webservice></pre> <p>このフィールドの指定については、次の「ソフトコード値のガイドライン」を参照してください。</p>

注意:

バージョン・プロパティはリリース9.1更新3.3以降にのみ適用されます。

2.6.1. ソフトコード値のガイドライン

One View Reporting BI Publisher接続テンプレートを更新する際には、次のガイドラインに従い、有効なソフトコード値パラメータを確実に指定してください。

2.6.1.1. HTTPアドレス

HTTPアドレスは、次の形式に従い、完全修飾の有効なOracle BIアプリケーション・サーバー名、またはIPアドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

http://<server>:<port>

2.6.1.2. ユーザー名

ユーザー名は、管理権限を持つ有効なBI Publisherユーザー名である必要があります。

2.6.1.3. _||_BI_PASSWORD_||_

管理者がOracle BIユーザーのパスワードを指定する場合、2つの方法があります。

- ソフトコード値でプレースホルダ・パラメータ(マスクされたパラメータ)を使用し、その値をグリッド内のパラメータに割り当てます。前述の例では、BI_PASSWORDというプレースホルダ・パラ

メータを使用し、グリッド内でBI_PASSWORD変数を定義しています。_||_というプレフィックスとポストフィックスは、プレースホルダ変数のマーカーです。

このように使用すると、値は暗号化されてからデータベースに保存され、将来の表示用にマスクされます。

- ソフトコード値で直接平文を使用します。

2.7. One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成

この項では、ソフトコード・レコードの概要とソフトコード・レコードの作成方法について説明します。

2.7.1. 概要

HTMLサーバーからBI Publisherサーバーへの接続を確立するには、BI Publisherソフトコード・レコードを設定する必要があります。ソフトコード・レコードは、環境ごと、ユーザー（またはロール、あるいは*PUBLIC）ごとに設定します。ソフトコード・レコードを*PUBLICと特定の環境に対して設定すると、その環境にログインしたユーザーはすべて、同じソフトコード・レコードを使用してBI Publisherサーバーを検索し、接続することになります。ソフトコード・レコードを設定するには、ソフトコード・レコード(P954000)アプリケーションを使用します。

設定するソフトコード・レコードの数は、ユーザーの設定方法によって異なります。複数のソフトコード・レコードを別々に設定しても構いません。ユーザーを2つのグループに分けることをお勧めします。

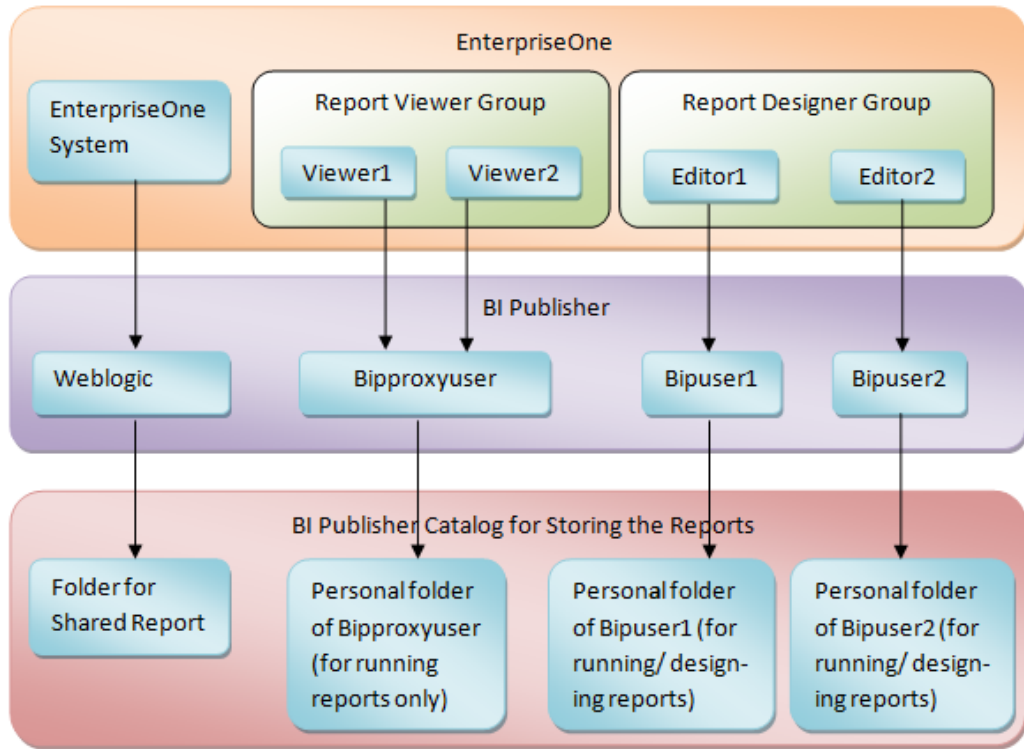
ビューア・グループ

このグループは、レポートの設計ではなくレポートの表示のみに関心があるJD Edwards EnterpriseOneユーザーで構成されます。このユーザー・グループの場合、BI Publisherプロキシ・ユーザーを1つ設定し、ソフトコード・レコード内のプロキシ・ユーザー設定を共通の個人用資格証明として共有させます。これらのユーザーのユーザー・プロファイルに、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングを設定しないでください。権限を設定するには、ランタイム機能権限アプリケーション(P958974)でJD Edwards EnterpriseOneアカウントまたは共通のJD Edwards EnterpriseOneロールにOne Viewレポートを実行する権限を割り当てます。

設計者グループ

このグループは、新規および既存のレポートを設計するJD Edwards EnterpriseOneユーザーで構成されます。このユーザー・グループの場合、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルに、BI Publisherサーバー上の個々のBI Publisherアカウントと、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへの個々のユーザー・マッピングを設定します。ユーザー・プロファイル内のJD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへの個々のユーザー・マッピング設定は、ソフトコード・レコードのプロキシ・ユーザー設定より優先度が高くなります。ランタイム機能権限アプリケーション(P958974)でこれらのユーザーにOne Viewレポートを設計および共有する権限を割り当てます。

図2.3 ビューア・グループと設計者グループの例



次の規則に基づき、ユーザー・プロファイルとソフトコード・レコードの両方で個人用資格証明があるかどうかチェックされます。

1. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれておらず、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されていない場合、One View Reportingはそのユーザーに対して無効になります。
2. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれておらず、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されている場合、そのユーザーは個人用のBI Publisherアカウントを使用してBI Publisherにアクセスします。
3. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれており、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されていない場合、そのユーザーはプロキシ・ユーザーを使用してBI Publisherにアクセスします。
4. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれており、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されている場合、そのユーザーは個人用のBI Publisherアカウントを使用してBI Publisherにアクセスします。

重要:

必ず、使用する予定があるすべてのユーザーまたはロールに対してソフトコード・レコードを設定してください。

2.7.2. ソフトコード・レコードの作成

One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードを作成するには、次の手順に従います。

1. ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ソフトコード管理」、「ソフトコード・レコード」の順に選択して、P954000アプリケーションにアクセスします。
2. 「追加」を選択します。
3. 次の情報を入力します。

フィールド	値
ユーザー/ロール	JD Edwards EnterpriseOneユーザー、ロールまたは*PUBLICを入力します。全ユーザー用の1つのレコードを設定する場合は*PUBLICを使用します。 注意: これは管理ユーザーIDである必要があります。必ず、使用する予定があるすべてのユーザーおよびロールに対してソフトコード・レコードを設定してください。
環境名	このソフトコード・レコードを作成するJD Edwards EnterpriseOne環境を入力します。
テンプレート名	JDE_ONEVIEW_CONNECTION
ソフトコード・キー	ONEVIEW_BIP_CONN

重要:

ソフトコード・キーの値はONEVIEW_BIP_CONNである必要があります。このフィールドには他の値は使用できません。

4. 「ソフトコード値のロード」ボタンをクリックし、「ソフトコード記述」フィールドと「ソフトコード値」フィールドにJDE_ONEVIEW_CONNECTIONテンプレートの情報を取り込みます。
5. マスク・フィールドのマスク値を入力します(たとえば、BI_PASSWORDの値を入力します)。
6. プロキシ・ユーザーを使用する場合は、プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの値を入力します。これらの値の指定は任意です。ルート・カタログのプロパティの後ろに、2つの新しいプロパティを兄弟タグとして追加する必要があります。

注意:

このプロパティの名前は、proxy userおよびproxy passwordとしてください。次に例を示します。

```
<property><name>proxy user</name><value>_||_PROXY_USER_||_</value></property>
```

```
<property><name>proxy password</name><value>_||_PROXY_PASSWORD_||_</value></property>
```

グリッドに_||_PROXY_USER_||_と_||_PROXY_PASSWORD_||_の値を入力します。

7. (リリース9.1更新3.3)bip versionプロパティの値を入力します。

```
<property><name>bip version</name><value>11.1.1.7.0</value></property>
```

8. サーバーとポートを特定のインストールに合わせて変更します。
9. 「OK」をクリックしてレコードを保存します。

注意:

各パス・コードのソフトコード・レコードを追加する必要があります。

2.7.3. ソフトコード値のガイドライン

One View Reporting BI Publisher接続テンプレートを更新する際には、次のガイドラインに従い、有効なソフトコード値パラメータを確実に指定してください。

2.7.3.1. HTTPアドレス

HTTPアドレスは、次の形式に従い、完全修飾の有効なOracle BIアプリケーション・サーバー名、またはIPアドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

http://<server>:<port>

2.7.3.2. ユーザー名

ユーザー名は、管理権限を持つ有効なBI Publisherユーザー名である必要があります。

2.7.3.3. `__BI_PASSWORD__`

管理者がOracle BIユーザーのパスワードを指定する場合、2つの方法があります。

- ソフトコード値でプレースホルダ・パラメータ(マスクされたパラメータ)を使用し、その値をグリッド内のパラメータに割り当てます。前述の例では、BI_PASSWORDというプレースホルダ・パラメータを使用し、グリッド内でBI_PASSWORD変数を定義しています。__というプレフィックスとポストフィックスは、プレースホルダ変数のマーカーです。

このように使用すると、値は暗号化されてからデータベースに保存され、将来の表示用にマスクされます。

- ソフトコード値で直接平文を使用します。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

2.8. One View Reporting機能権限の設定

この項の内容は次のとおりです。

- ランタイム機能定義の確認
- 機能権限の設定
- ユーザー別または環境別の機能権限のコピー

2.8.1. ランタイム機能定義の確認

レポートの実行や共有レポートの更新など、One View Reporting使用権限の表示または設定を行うには、ランタイム機能定義アプリケーション(P958973)を使用します。One View Reportingには4種類の使用レコードが用意されています。次のとおりです。

JDE_NOONEVIEW

ユーザーは、One Viewへのアクセスを許可されません。

JDE_RUNONEVIEW

ユーザーは、One Viewレポートの実行のみ許可されます。

JDE_DESIGNONEVIEW

ユーザーは、One Viewレポートの実行、追加、編集および削除を許可されます。

JDE_DESIGNSHAREDONEVIEW

ユーザーは、One Viewレポートの実行、追加、編集および削除を許可され、One Viewレポートのプロモートを要求できます。

これらのレコードを表示するには、次の手順に従います。

1. 「ランタイム機能管理」(GH9098)メニューからランタイム機能定義アプリケーションにアクセスするか、「略式コマンド」にP958973と入力します。

ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ランタイム機能管理」、「ランタイム機能定義」の順に選択して、アクセスすることもできます。

2. 「One Viewレポート」オプションを選択します。
3. 「検索」を選択します。

注意:

One View Reportingでは、この4つのレコードのみが使用されます。他のレコードを追加する必要はありません。

2.8.2. 機能権限の設定

ユーザーのアクセス制御を設定するには、ランタイム機能権限アプリケーション(P958974)を使用します。個々のユーザー、ロール、または*Publicに対して、システム・コード、アプリケーション・レベル、フォーム・レベル、*ALLなどの様々なレベルで、特定のOne View Reporting機能を設定できます。

ライセンス保有製品(例: Inventory、FinancialsまたはSales)に固有のロールを追加することが必要な場合があります。

アプリケーションIDとしてDATABROWSEと入力し、他のフィールドには*ALLと入力すると、データ・ブラウザへのアクセス制御も設定できます。

ユーザーのアクセス制御を設定するには、次の手順に従います。

1. P958973から「フォーム」エグジット、「機能権限」の順に選択するか、「ランタイム機能管理」(GH9098)メニューから直接、P958974アプリケーションにアクセスします。

ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ランタイム機能管理」、「ランタイム機能権限」の順に選択して、アクセスすることもできます。

2. 「追加」を選択します。
3. 「機能権限の改訂」フォームに、レコードを追加する機能名(JDE_RUNONEVIEWなど)を入力し、「検索」を選択します。こうすれば、新しいレコードを追加するために多数のレコードをスクロールする必要がなくなります。

4. 最初の空のグリッド行までスクロールし、次の情報を入力します。

フィールド	値
環境名	環境名を入力します。
ユーザー/ロール/*Public	権限レコードを作成するユーザーまたはロールを入力します。*Publicも入力できます。
機能名	ユーザーに付与する適切な権限を備えた機能名を入力します。 これは、前の項で確認または追加した4つの機能の1つです。
フォーム名	フォーム名または*ALLを入力します。
オブジェクト名	このフィールドは、フォームに基づいて値が自動的に取り込まれます。このフィールドにDATABROWSEと入力し、データ・ブラウザの機能を有効にすることもできます。
製品コード	製品コードを入力します。

5. 「OK」をクリックしてレコードを保存します。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

2.8.3. ユーザー別または環境別の機能権限のコピー

機能権限レコードを作成した後、あるユーザーまたはロールから別のユーザー、ロールまたは*Publicにすべての機能権限レコードをコピーできます。また、ある環境から別の環境にすべての機能権限レコードをコピーすることも可能です。

ユーザー別コピーを行うには、次の手順に従います。

1. 「ランタイム機能管理」(GH9098)メニューからP958974アプリケーションにアクセスします。
2. 「フォーム」メニューから「ユーザー別コピー」を選択します。
3. 「機能権限のコピー」フォームで、機能権限のコピー元となるユーザーまたはロールを入力します。次に、機能権限のコピー先となるユーザー、ロールまたは*PUBLICを入力します。
4. 「保存」ボタンをクリックします。

環境別コピーを行うには、次の手順に従います。

1. 「ランタイム機能管理」(GH9098)メニューからP958974アプリケーションにアクセスします。
2. 「フォーム」メニューから「環境別コピー」を選択します。
3. 「機能権限のコピー」フォームで、機能権限のコピー元となるソース環境と、ターゲット環境を入力します。
4. 「保存」ボタンをクリックします。

2.9. BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング

レポートの作成および編集を行う必要のあるすべてのJD Edwards EnterpriseOneユーザーについて、各JD Edwards EnterpriseOneユーザーをBI Publisherユーザーにマップする必要があります。パ

ブリック・レポートを実行するのみのJD Edwards EnterpriseOneユーザーの場合、ソフトコード・パラメータの<proxy user>と<proxy password>を使用してBI Publisherに接続できるため、これらのJD Edwards EnterpriseOneユーザーをマップする必要はありません。

注意:

プロキシ・ユーザーを使用中の場合、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルではパスワードを求められません。

この項では、BI PublisherのユーザーIDおよびパスワードをJD Edwards EnterpriseOneのユーザー・プロファイルに入力し、EnterpriseOneユーザーの代わりにBI PublisherのユーザーIDおよびパスワードでBI Publisherサーバーに接続できるようにする方法について説明します。

JD Edwards EnterpriseOneユーザーをBI Publisherユーザーにマップするには、次の手順に従います。

1. JD Edwards EnterpriseOneの「カスタマイズ」メニューから「ユーザー別システム・オプション」を選択します。
2. 「ユーザー・プロファイルの改訂」を選択します。
3. 「フォーム」エグジットから、「BI Publisherパスワード」を選択します。
4. 「BI PublisherユーザーID」フィールドと「BI Publisherパスワード」フィールドにBI Publisherアカウントの情報を入力します。
5. 設定が有効になるように、JD Edwards EnterpriseOneからログアウトして再度ログインします。
6. BI PublisherサーバーでユーザーIDとパスワードを変更するたびに、ここでも変更を行う必要があります。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

注意:

BI PublisherですべてのBI Publisherユーザーが作成されたら、BI Publisherサーバーを再起動して、それらのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneから接続できるようにする必要があります。

2.10. One Viewレポートのインストール

One Viewレポートをインストールするには、次の手順に従います。

1. JD Edwards EnterpriseOneバージョンおよびBI Publisherバージョンに適用可能なOne Viewレポートのzipファイルを、Update Centerからダウンロードします。

<https://updatecenter.oracle.com/>

2. BI PublisherユーザーにマップされたJD Edwards EnterpriseOneユーザーとしてHTMLサーバーにログインします。

注意:

「[27 ページの 機能権限の設定](#)」の説明に従って、ユーザーにOne View Reporting機能へのアクセス権があることを確認します。

3. 構成が正しいことを確認するために、アプリケーションを起動し、新しいレポートを追加してみます。BI Publisher接続が正しく設定されていれば、新しいレポートを保存した後、BI Publisher レイアウト・エディタが表示されます。
4. 「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「One Viewレポート」の順に移動し、「One Viewレポートのインポートの処理」(P982402)を開きます。
5. 「追加」を選択します。
6. 「One Viewレポートのインポートの処理 - ユーザー生成コンテンツのインポート」フォームで、「インポート・ファイルのロード」ボタンを選択します。
7. ダウンロードしたOne Viewレポートのzipファイルを検索して選択します。
8. 「ファイルのアップロード」フォームで「ロード」ボタンを選択します。

ファイルがインポートされます。

9. インポート・レコードを選択してインポート結果を確認します。
10. 「インポート済オブジェクトの詳細」フォームで、全アイテムの「状況記述」カラムに「完了済みプロセス」と表示されていることを確認します。

インポートしたOne Viewレポートを別のパス・コードに転送する必要がある場合は、[「37 ページの One Viewレポートの転送」](#)を参照してください。

2.11. 構成設定の処理

エンドユーザー体験を最大限に高めるには、これらのWebランタイム構成設定を使用します。これらのアクセスと変更は、Server Managerの「Webランタイム」、「Webオブジェクト設定」で行えます。設定は次のとおりです。

One View Reporting: デフォルト・レコード件数

One Viewレポートを実行する際、レポートで実行されるレコードの件数は3つのオプションによって制御されます。One Viewレポートのユーザー・インターフェイス(「レイアウト」タブ)に表示される3つのオプションは次のとおりです。

- レコード件数を取得: X
- グリッドで現行データを使用
- すべてのレコードを取得

最初のオプション「レコード件数を取得」を選択すると、このServer Manager設定を使用して、レポートのデフォルト・レコード件数が設定されます。

One View Reporting: 最大レコード件数

これは、One Viewレポートに対して取得されるレコードの最大数です。

One View Reporting: 接続待ち時間

これは、BI Publisherサーバーへの接続を待つデフォルトの時間(ミリ秒)です。この時間が経過すると、最初のOne Viewレポートが起動されます。ネットワークが遅い場合はこの値を大きく、ネットワークが速い場合はこの値を小さくしてください。

ランタイム・パラメータとメトリック・パラメータのServer Managerインターフェイスでは、そのパラメータに適用される各設定の詳しい使用方法を確認できます。これにアクセスするには、目的のパラメータの「i」(情報)アイコンをクリックします。

2.12. HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項

One View Reportingが、Oracle HTTP Server(OHS)などのHTML Serverクラスタと機能するように設定するには、次の作業が必要です。

1. ツール・リリースが9.1.2.3以上、または9.1.3以上であることを確認します。
2. すべてのHTML Serverインスタンスが実際のバックエンドHTML Server URLを示すように、jas.iniを更新します。これを行うには、Server Managerの「Webランタイム」の「Webオブジェクト設定」セクションにある次のパラメータを使用します。

One View Reporting: ターゲットJASサーバーとポート

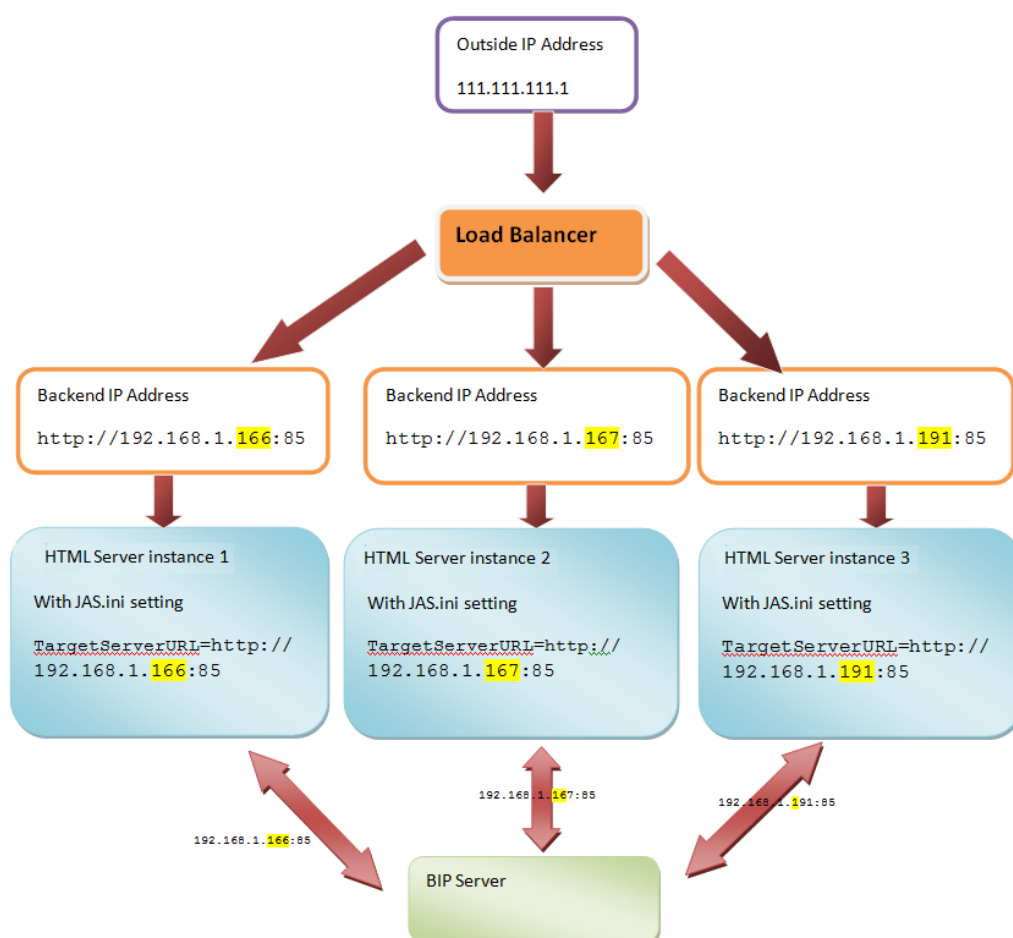
HTMLサーバーごとに、`http://<server>:<port>`の形式で値を設定する必要があります。ここで、<server>はバックエンドHTML Serverの完全修飾ホスト名またはIPアドレスです。

重要:

Oracle HTTP Serverからの垂直的または水平的なクラスタ・サーバー設定の場合、Server Managerがすべての.iniファイルを同期した後は、そのたびに設定を手動で追加する必要があります。

次の図は、一般的なクラスタリングまたはロード・バランシングの設定を示しています。

図2.4 HTML Serverクラスタリング



One Viewレポートの処理

この章の内容は次のとおりです。

- 33 ページの「One Viewレポートについて」
- 34 ページの「One Viewレポートのプロモート」
- 35 ページの「One Viewレポートのプロモーション履歴の確認」
- 35 ページの「One Viewレポートの削除」
- 35 ページの「One Viewレポートのエクスポート」
- 36 ページの「One Viewレポートのインポート」
- 37 ページの「One Viewレポートの転送」

3.1. One Viewレポートについて

One Viewレポートは次のコンポーネントで構成されます。

- Business Intelligence (BI) Publisherデータ・モデル: BI Publisherサーバー上の<report name>.xdmzファイルです。
- BI Publisherレポート: BI Publisherサーバー上の<report name>.xdozファイルです。
- One Viewレポートのレポート定義: レポートのメタデータで、JD Edwards EnterpriseOne内にあります。

One Viewレポートは、エンドユーザーがJD Edwards EnterpriseOneクエリー・フォームの「One View」メニューから「レポートの追加」を選択すると作成されます。これらのOne Viewレポートは、Oracle BI Publisherサーバー上に格納されます。One Viewレポートのメタデータは、JD Edwards EnterpriseOneのテーブルにも格納されます。

3.1.1. One Viewレポートの処理

One Viewレポートに対して行う処理には、レポートの確認、プロモート、エクスポート、インポートおよび転送があります。One View Reportingアプリケーションをグループ化するために、「One Viewレポート」(GH9115)という新しいメニューが作成されています。このメニューには次のアプリケーションが含まれています。

メニューでのアプリケーション名	アプリケーション ID	目的
One Viewレポートの処理	P952400	このアプリケーションは、システムで作成されたすべてのOne Viewレポートを確認する場合に使用します。レポートの削除とレポートのプロモートもこのアプリケーションで行えます。
One Viewレポートのエクスポートの処理	P982402	このアプリケーションは、ローカル・ドライブに格納された.zipファイルに共有One Viewレポートをエクスポートする場合に使用

メニューでのアプリケーション名	アプリケーション ID	目的
One Viewレポートのインポートの処理	P982402	このアプリケーションは、One Viewレポートの.zipファイルをインポートする場合に使用します。インポートを使用すると、あるBI Publisherサーバーから別のBI Publisherサーバーへのレポートの移動、あるパス・コードから別のパス・コードへのレポートの移動、および任意のOne View Reportingパッチのインストールが行えます。
One Viewレポートの転送の処理	P982403	このアプリケーションは、パス・コード間でOne Viewレポートを転送する場合に使用します。これを使用すると、開発用のパス・コードからテスト用のパス・コード、さらには本番用のパス・コードにOne Viewレポートを転送できます。

3.2. One Viewレポートのクエリー

One Viewレポートは、One Viewレポートの処理アプリケーション(P952400)を介して表示できます。「One Viewレポート」(GH9115)メニューからOne Viewレポートの処理アプリケーションにアクセスします。すべてのレポートを表示するには、「すべて」ラジオ・ボタンを選択します。システム内のすべてのOne Viewレポートがグリッドに表示されます。

ユーザーが作成した当初のレポートは、個人用レポートです。状況は「編集中」(02)です。ユーザーがレポートのプロモートを要求すると、レポートは個人用のままですが、状況が「プロモート保留」(07)に変わります。パワー・ユーザーがレポートをプロモートすると、個人用レポートがパブリック・レポートにコピーされます(個人用レポートは削除されます)。パブリック・レポートの状況は「共有」(08)です。パワー・ユーザーがプロモーション要求を却下した場合、レポートは個人用レポートのままで、状況が「編集中」(02)に設定されます。One View Reportingでは、H95/USユーザー定義コード(UDC)のハードコードされたアクティビティ状況が使用されます。

3.3. One Viewレポートのプロモート

新たに作成したOne Viewレポートを共有するには、まずパワー・ユーザーまたは管理者がそれをプロモートする必要があります。この操作により、レポートが個人用フォルダから共有フォルダに移動します。共有レポートはパブリック・レポートです。つまり、社内の他のユーザーも利用できます。

One Viewレポートをプロモートするには、次の手順に従います。

1. 「One Viewレポート」(GH9115)メニューからOne Viewレポートの処理アプリケーション(P952400)にアクセスします。
2. 「One Viewレポートの処理」フォームで、「プロモーション保留」オプションが選択されていることを確認し、「検索」をクリックします。まだプロモートされていないレポートのみがグリッドに表示されます。
3. ロー見出しにチェック・マークを付けて、プロモートまたは却下するレポートを選択します。
4. レポートをプロモートするには、「ロー」メニューから「プロモーションの承認」を選択します。これで、他のユーザーがレポートにアクセスできるようになります。

5. レポートがプロモートされたことを確認するには、BI Publisherを開いて、レポートがあるカタログから別のカタログにコピーされたことを確かめます。アクティビティ状況も「共有」に変わっていることがわかります。

BI Publisherサーバーでは、新しい共有レポートがshared/JD Edwards/pathcode/app_id/report_nameフォルダに表示されます。ただし、管理者以外のアカウントでは見えません。

6. レポートを却下するには、「ロー」メニューから「プロモーションの却下」を選択します。

3.4. One Viewレポートのプロモーション履歴の確認

One Viewレポートのプロモーション履歴を確認するには、次の手順に従います。

1. 「One Viewレポート」(GH9115)メニューからOne Viewレポートの処理アプリケーション(P952400)にアクセスします。
2. 「One Viewレポートの処理」フォームで、確認するレポートに応じて「プロモーション保留」または「すべて表示」を選択し、「検索」をクリックします。
3. レポートのプロモーション履歴を確認するには、ロー見出しにチェック・マークを付けてレポートを選択し、「ロー」、「ログ」の順に選択します。

「ログ詳細」フォームで、グリッド内のログ順序を選択し、「ロー」、「詳細メッセージ」の順に選択すると、詳細を確認できます。

3.5. One Viewレポートの削除

承認保留中のレポートも含めて、任意のレポートを削除できます。複数のレポートを一度に削除することも可能です。レポートを削除すると、データ・モデル、レポートおよびすべてのテンプレートが削除されます。

One Viewレポートを削除するには、次の手順に従います。

1. 「One Viewレポート」メニュー(GH9115)からOne Viewレポートの処理アプリケーション(P952400)にアクセスします。
2. 「One Viewレポートの処理」フォームで、「プロモーション保留」または「すべて」オプションを選択し、「検索」をクリックします。
3. ロー見出しにチェック・マークを付けて、削除するレポートを選択します。
4. 「削除」を選択します。
5. 「削除しますか。」と尋ねられたら、「はい」を選択します。
6. BI Publisherサーバーでレポートが削除されたことを確認します。

注意:

誰かが共有レポートを予約し、その共有レポートから個人用レポートを作成して、個人用レポートを削除した場合は、共有レポートの予約が解除されます。共有レポートは削除されません。

3.6. One Viewレポートのエクスポート

ローカル・ドライブに保存されている.zipファイルに共有One Viewレポートをエクスポートするには、One Viewレポートのエクスポート・アプリケーション(P982402)、バージョンZJDE0001を使用し

ます。エクスポートは、あるBI Publisherサーバーから別のBI Publisherサーバーにレポートを移動するための唯一の方法です。

One Viewレポートをエクスポートするには、次の手順に従います。

1. 「One Viewレポート」メニュー(GH9115)からOne Viewレポートのエクスポートの処理アプリケーション(P982402)にアクセスします。
2. 「追加」を選択します。
3. 「ユーザー生成コンテンツのエクスポート」フォームで、「エクスポート名」フィールドにエクスポートの名前を入力します。
4. オブジェクト・タイプとして「One Viewレポート」を選択します。
5. QBE行を使用して、エクスポートするレポートをグリッド内で検索します。
6. ロー見出しにチェック・マークを付けて、エクスポートする各レポートを選択します。
7. 「OK」を選択します。
8. 「ファイルのダウンロード」ウィンドウで「保存」を選択します。
9. ファイルを保存する場所に移動し、「保存」を選択します。ファイルは、選択した場所に.zipファイルとして保存されます。
10. ダウンロード完了ウィンドウで「閉じる」を選択し、「ファイルのダウンロード」フォームでもう一度「閉じる」を選択します。
11. 状況記述が「完了済みプロセス」であることを確認します。
12. トラブルシューティングを行うか、エクスポート・プロセスの詳細を確認するには、「ロー」メニューから「ログ」を選択します。
13. ログの詳細を表示するには、グリッドでログ順序を選択し、「ロー」メニューから「詳細メッセージ」を選択します。

3.7. One Viewレポートのインポート

One Viewレポートの.zipファイルをインポートするには、One Viewレポートのインポートの処理アプリケーション(P982402)、バージョンZJDE0002を使用します。インポートを使用すると、あるBI Publisherサーバーから別のBI Publisherサーバーへのレポートの移動、あるパス・コードから別のパス・コードへのレポートの移動、および任意のOne View Reportingパッチのインストールが行えます。

One View Reportingパッチはzipファイルとして配布されます。One View Reportingの修正は更新センターからダウンロードできます。パッチをインストールするには、zipファイルに含まれるOne Viewレポートをインポートします。

One Viewレポートをインポートするには、次の手順に従います。

1. 「One Viewレポート」メニュー(GH9115)からOne Viewレポートのインポートの処理アプリケーション(P982402)にアクセスします。
2. 「追加」を選択します。
3. 「ユーザー生成コンテンツのインポート」フォームで、「インポート・ファイルのロード」ボタンを選択します。

4. 「参照」を選択し、インポートする.zipファイルを検索して、「開く」を選択します。
5. 「ファイルのアップロード」フォームで「ロード」を選択します。「ユーザー生成コンテンツのインポート」フォームで、.zipファイルの状況が「処理中」と表示されます。
6. 「OK」を選択してOne Viewレポートをインポートします。
7. 「検索」を選択してグリッド内でレポートを検索し、レポートがロードされたことを確認します。BI Publisherでカタログを確認して、レポートがインポートされたことを確かめることもできます。
8. トラブルシューティングを行うか、インポート・プロセスの詳細を確認するには、「ロー」メニューから「ログ」を選択します。
9. ログの詳細を表示するには、グリッドでログ順序を選択し、「ロー」メニューから「詳細メッセージ」を選択します。

3.8. One Viewレポートの転送

One Viewレポートをあるパス・コードから別のパス・コードに転送するには、One Viewレポートの転送の処理(P982403)アプリケーションを使用します。ログイン・ユーザーのソフトコード・レコードによって、どのBI Publisherサーバーが影響を受けるかが決まります。

注意:

「TOパス・コード」に使用するBI Publisherサーバーは、One Viewレポートの転送元となるBI Publisherサーバーと同じである必要があります。

ターゲット・パス・コードが別のBI Publisherサーバーである場合、転送プロセスがスムーズに行えるように、エクスポート/インポート・プロセスを使用してください。

One Viewレポートを転送するには、次の手順に従います。

1. 「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「One Viewレポート」の順に移動し、「One Viewレポートの転送の処理」(P982403)を開きます。
2. 「追加」を選択します。
3. 「ユーザー生成コンテンツの転送」フォームで、「転送名」フィールドに転送の一意の名前を入力します。
4. オブジェクト・タイプとして「One Viewレポート」を選択します。
5. QBE行を使用して、転送するレポートを検索します。
6. ロー見出しにチェック・マークを付けて、転送する各レポートを選択します。
7. 「選択」をクリックします。
8. 「転送用パス・コード」フォームで、ロー見出しにチェック・マークを付けてTOパス・コードを選択し、「OK」をクリックします。
9. 転送が正しく完了したことを確認するには、「転送済みジョブの処理」フォームで転送名を検索し、「プロセス状況記述」カラムに「完了済みプロセス」と表示されていることを確かめます。
10. トラブルシューティングを行うか、転送プロセスの詳細を確認するには、「ロー」メニューから「ログ」を選択します。
11. ログの詳細を表示するには、グリッドでログ順序を選択し、「ロー」メニューから「詳細メッセージ」を選択します。

管理タスク

この章の内容は次のとおりです。

- 39 ページの「One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所」
- 39 ページの「言語サポート」
- 40 ページの「トラブルシューティング」
- 44 ページの「パフォーマンスに関する考慮事項」
- 45 ページの「スケーラビリティに関する考慮事項」

4.1. One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所

One Viewレポートは次の場所に保存されます。

- <MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/config /bipublisher/repository/Reports/JD Edwards
- <MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/config /bipublisher/repository/Users/<user or proxy name>/JD Edwards

BI Publisherのログ・ファイルは次の場所に保存されます。

- <MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/servers /AdminServer/logs
- <MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/servers /AdminServer/logs/bipublisher

HTMLサーバー・インスタンスには実際のOne View ReportingおよびWeb Servicesログが含まれます。

4.2. 言語サポート

現在、One View Reportingでは次の言語がサポートされています。

- アラビア語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語
- チェコ語
- デンマーク語
- オランダ語
- フィンランド語
- フランス語 - フランス

- ドイツ語
- ギリシャ語
- ハンガリー語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語
- ポーランド語
- ポルトガル語 - ブラジル
- スペイン語
- スウェーデン語
- トルコ語
- ロシア語

前述の言語を使用しているJD Edwards EnterpriseOneユーザーは、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルを該当する言語に設定する必要があります。実行時には、レポートをユーザーの言語で実行するためにユーザーの使用言語がBI Publisherに渡されます。

また、BIレイアウト・エディタのUI言語をユーザーが選択した言語に設定することも必要です。BI Publisherレイアウト・エディタで言語を設定するには、ユーザー名をクリックし、「マイ・アカウント」をクリックします。BI Publisherレイアウト・エディタには言語関連の設定が2つあります。

レポート・ロケール

BI Publisherレポートを実行する際の言語です。このフィールドは空白でも構いませんが、その場合はJD Edwards EnterpriseOneユーザーの言語設定を使用して適切なレポート・ロケールが渡されます。

UI言語

BI Publisherレイアウト・エディタ内のメニューおよび説明の言語です。これは、ユーザーが選択した適切な言語に変更できます。

提供されているすべてのJD Edwards EnterpriseOne One Viewレポートの内容は、前述の言語での翻訳です。

4.3. トラブルシューティング

この項では、発生する可能性のある問題と考えられる解決策について説明します。

4.3.1. 「One View」メニューがアプリケーションに表示されない

P01012やその他のアプリケーションに「One View」メニューが表示されない場合は、次のことを確認してください。

- JD Edwards EnterpriseOneユーザー・マッピングがP0092で正しく設定されていること。これは大文字小文字が区別されません。
- ユーザーIDとパスワードを使用してBI Publisherサーバーにログインできること。
- BI PublisherアカウントのロールがBIAuthorであること。

- 環境とユーザーの正しい組合せに対して、P954000でソフトコード・レコードが設定されていること。
- ユーザー・アカウントとアクセス先のフォームの機能権限がP958974で正しく設定されていること。

4.3.2. 「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない

「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない場合は、ブラウザのファイル・キャッシュを必ずクリアしてください。

4.3.3. 「One View」メニューはロードしているがレポートが表示されない

「One View」メニュー・アイコンをクリックして、「ロード中」という文字が表示されるのにレポートは表示されない場合、なおかつ9.1.0.2より前のバージョンのServer Managerを使用中の場合は、WebLogic 11gまたはWebSphere Application Server用の新規のOne View JVM設定を追加する必要があります。

WebLogic 11g用の新規のOne View JVM設定を追加するには、次のようにします。

1. WebLogic管理コンソールにログオンします。
2. 「ドメイン構造」で「環境」を開いてから、「サーバー」を選択します。
3. 「サーバーの起動」タブを選択します。
4. 次のJVM設定を「引数」に追加します。

```
-Djavax.xml.rpc.ServiceFactory=oracle.j2ee.ws.client  
.ServiceFactoryImpl
```

WebSphere Application Server用の新規のOne View JVM設定を追加するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server管理コンソールにjde_userとしてログオンします。
2. 「サーバー」、「サーバー・タイプ」、「WebSphere Application Servers」、「AS_JS_88」、「Javaおよびプロセス管理」、「プロセス定義」、そして「Java仮想マシン」の順に移動します。
3. 次の構文を「汎用JVM」設定フィールドに追加して保存します。

```
-Djavax.xml.rpc.ServiceFactory=oracle.j2ee.ws.client  
.ServiceFactoryImpl -Djavax.xml.soap.SOAPConnectionFactory=oracle.j2ee  
.ws.saaaj.client.p2p.HttpSOAPConnectionFactory
```

注意:

JASインスタンスのインストールに9.1.0.2以上のバージョンのServer Managerを使用中の場合、この設定は自動的に追加されます。

4.3.4. レポートの保存時にエラーが発生する

レポートを保存しようとしたときにエラーが発生する場合は、次のことを試してください。

- BI Publisherユーザーとパスワードのマッピングがユーザー・プロファイルに正しく設定されていることを確認します。
- BI Publisherサーバーを再起動して問題が解決するか試します。
- HTMLサーバーのエラー・ログにユーザーとパスワードが無効であるというエラー・メッセージが記録されている場合、ユーザー・プロファイルのユーザーとパスワードがBI Publisherサーバーと一致していません。
- JVM設定が正しく構成されていることを確認してください。「[41 ページの「One View」メニューはロードしているがレポートが表示されない](#)」の項を参照してください。

4.3.5. BIPレイアウト・エディタですべてのレポートについてエラーが発生する

BIレイアウト・エディタでOne Viewレポートをレンダリング中に、赤色のエラーや「PDFが見つかりません」というエラーが表示された場合は、次のことを確認してください。

- マシンが有線ネットワークを使用した企業ファイアウォールの内側にあること。無線ネットワークを使用している場合は、企業ファイアウォールの外側にあっても構いません。
- BI PublisherサーバーとHTMLサーバーが同じファイアウォールの内側にあること。そうでない場合は、IT部門に連絡し、BI PublisherサーバーとHTMLサーバーが相互にpingできるようネットワーク・セキュリティが設定されていることを確認してください。
- BI PublisherとHTMLサーバーが異なるドメインに存在する場合は、フル・アドレス(フル・ネームとドメインからなるIPアドレス)を使用してHTMLサーバーにアクセスしていること。

4.3.6. 「レポートを保存できませんでした」というエラーが発生する、または共有レポートの実行中に問題が発生する

作成中のレポートのデータ・モデルを保存しようとしたときに「レポートを保存できませんでした」というエラー・メッセージが表示された場合、または共有レポートを実行しようとしたときに「処理中」というポップアップ・メッセージが一瞬表示されるのみで何も起こらない場合は、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherサーバーへの接続に問題が発生している可能性があります。BI PublisherでBI Publisherユーザーを作成した後、JD Edwards EnterpriseOneから接続しようとする前に、BI Publisherサーバーを再起動する必要があります。

4.3.7. BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラープレートがない

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition(OBIEE)およびBI Publisherを同じサーバー上にインストールした場合、「共有フォルダ」の下の「コンポーネント」フォルダにボイラープレート機能が表示されない場合があります。

ボイラープレート機能をリロードするには、次のようにします。

1. BI Publisherサーバー(<http://host:port/xmlpserver>)にサインオンします。
2. 次のように「管理」、「システム・メンテナンス」、「サーバー構成」を選択します。

図4.1 サーバー構成



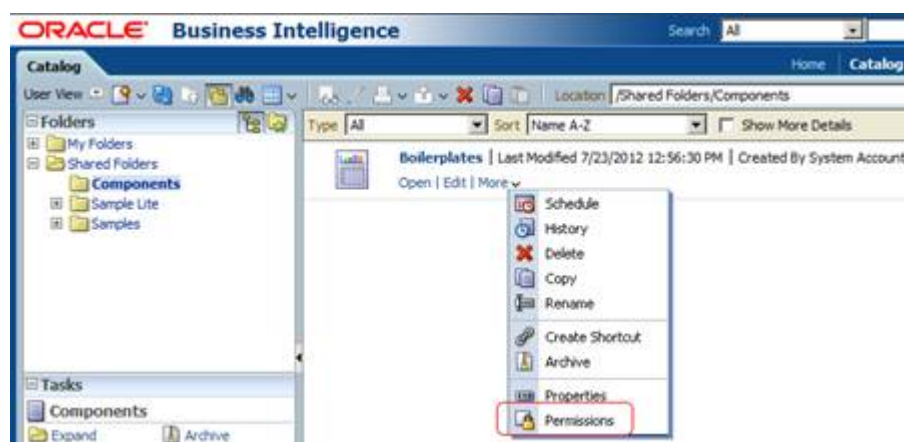
3. 「カタログ」フォームで「BIプレゼンテーション・カタログへのアップロード」をクリックします。
「管理」ページの右上隅に確認メッセージが表示されます。
4. 「適用」をクリックして構成を保存します。
5. アップロードが完了すると、「共有フォルダ」で「コンポーネント」が有効になって表示されます。

注意:

これはOBIEEでの統合BI Publisherであるため、BI Publisherからは権限を編集できません。セキュリティはOBIEEから編集する必要があります。

6. 権限を編集するには、OBIEE (<http://host:port/analytics>)にサインインします。
7. 「詳細」を選択してドロップダウン・メニューを開いてから、「権限」を選択します。

図4.2 権限



8. 権限を確認して、適宜編集します。

4.3.8. One Viewレポートのインポート中のバージョン不一致エラー

One Viewレポートとソフトコード・バージョン間でバージョンの不一致があることを示すエラー・メッセージを受け取った場合は、ソフトコード・レコードで最新バージョンのBI Publisher用のプロパティが欠落しています。

4.3.9. レポートが最大レコード数を越えた旨の警告（リリース9.1更新5）

レポートの実行時に、レポートが最大レコード数を越えた旨の警告が表示された場合は、レポートの「ローセットを選択」の値が原因になっている可能性があります。ローセット・オプションは、レポートで使用するデータを指定するものです。「レコード件数を取得」オプションを使用する場合、レポートには、指定したレコード数を越える数のレコードがクエリー条件と一致していても、指定したレコード数までのデータが表示されます。このフィールドのデフォルトは500ですが、この値の構成は会社ごとに異なっても構いません。また、取得するレコードの数を制限する場合は、レポートの実行時または新規レポートの追加時に、この値を一時変更できます。

「ローセットを選択」の値として「グリッドで現行データを使用」オプションを選択すると、レポートにはグリッドのデータのみが表示されます。そのため、クエリー条件に一致するレコードがグリッドの現行データより多い場合は、この警告が表示されることがあります。

最後に、「すべてのレコードを取得」オプションを使用する場合は、レコード数がシステム制限を超えると、この警告が表示されます。

レポート・データがこの設定により制限されている場合、次のポップアップ警告が表示されます。「警告: レポートの最大レコード数を越えました。クエリーでxxローが検出されましたが、レポートはyyローに制限されています」。ここで、xxは取得したローの合計数を表し、yyは「レコード件数を取得」の値を表しています。この警告で「OK」をクリックすればレポートは実行されますが、「レコード件数を取得」フィールドで指定した値に基づいて該当するデータのサブセットのみが返されます。

注意:

前述のとおり、レポートはレポート・データ・セットで指定したロー数によって制限されますが、システム制限によっても制限されます。システム制限がレポート・データ・セットの制限より小さい場合、小さい方のデータ制限が適用されます。たとえば、One Viewレポートのデータ・セット制限が10000ロー、システム制限が5000ローの場合、One Viewレポートは5000ローに制限されます。

詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Reportingユーザー・ガイド』の「One Viewレポートの実行」の「レイアウト」タブに関する項を参照してください。

4.4. パフォーマンスに関する考慮事項

各レポートのパフォーマンスは、各レポートが取得するローの数、各レポートが処理するロジックの量、およびレポート上のグラフィカル・コンポーネントとテーブル・コンポーネントの数によって変わります。

レポートのパフォーマンスを向上させるには、次の手順に従います。

1. 各レポートが取得するローの数を制限します。
2. 各グリッド・ローについて、One Viewレポート・アプリケーションでフェッチされるイベント・ルールを確認します。
3. レポートのグラフィカル・コンポーネントとテーブル・コンポーネントを確認します。カラム数の多いピボット・テーブルは、レンダリングに長時間かかることがあります。この場合は、ピボット・テーブルのカラム数を減らします。

一般に、データ・モデルで選択されているフィールドの数を減らすと効果的です。これにより、レポートの生成とレンダリングが高速化されます。

One View Reportingは対話型のソリューションであり、何万件ものデータベース・レコードを取得するように設計されていません。大量のデータを扱う必要がある場合は、読取専用のJDBCドライバまたはUBEレポートを使用すると、パフォーマンスが向上します。

4.5. スケーラビリティに関する考慮事項

One Viewレポートを実行すると、HTMLサーバーがレポート・データを取得します。データは、レポートのレンダリングと生成のためにBI Publisherサーバーに渡されます。つまり、One Viewレポートを実行するとHTMLサーバーとバックエンド・データベースの負荷が増えます。負荷の増加量は、システムにクエリー・ユーザーを追加した場合とほぼ同じです。

パート II. One Viewウォッチリスト管理（リリース9.1更新3）

本書のこの部分はToolsリリース9.1更新3以降にのみ適用されます。

One Viewウォッチリストはユーザー定義基準に一致するアイテムのコレクションを表します。これを使用すると、警告対象にする情報を定義できます。たとえば、実行が必要な未処理タスクや、超過したしきい値の警告を受け取ることができます。ウォッチリストを使用すると、ユーザーは、こうした情報を簡単に受け取ることができます。

管理者はOne Viewウォッチリストを利用して、ウォッチリストを表示、作成および共有できるユーザーを安全に管理できます。アクセス権がある既存のウォッチリストが存在する場合、「ウォッチリスト」メニューがJD Edwards EnterpriseOne内のメニュー・バーに表示されます。

ウォッチリストはJD Edwards EnterpriseOneクエリーから構築されるため、クエリー機能をサポートするフォームでのみサポートされます。

構成は次のとおりです。

- [49 ページの5章One Viewウォッチリスト・セキュリティの設定](#)
- [53 ページの6章One Viewウォッチリストの管理タスク](#)

One Viewウォッチリスト・セキュリティの設定

この章の内容は次のとおりです。

- [49 ページの ウォッチリスト・セキュリティの概要](#)
- [49 ページの ウォッチリスト表示セキュリティの設定](#)
- [50 ページの ウォッチリスト操作セキュリティの設定](#)

5.1. ウォッチリスト・セキュリティの概要

ウォッチリストに使用されるセキュリティは2種類あります。

- 表示セキュリティ: ユーザーが共有ウォッチリストを表示できます。
- 操作セキュリティ: ユーザーがウォッチリストを作成、またはウォッチリストを作成して共有することができます。

ウォッチリストへのアクセスを提供するにはセキュリティ・レコードを設定する必要があります。レコードが設定されていないユーザーは、どのウォッチリストにもアクセスできません。

Webオブジェクト・セキュリティ・アプリケーションには、2つのバージョンがあります。

- ZJDE0001: これはデフォルトのバージョンで、機能がドキュメント化されています(例: 「表示」アイコンをクリックすると緑色の丸に変わります)。
- ZJDE0002: このバージョンを使用すると、入力フォームではクリック可能なオプションが機能しなくなります。改訂フォームを表示するには、グリッド・ロー入力を選択する必要があります。こうすることにより、クリックしたアイコンが緑色の四角に変わります。このオプションは、より慎重に操作を行う必要がある場合のために用意されています。

5.2. ウォッチリスト表示セキュリティの設定

ウォッチリスト表示セキュリティを設定するには、次のようにします。

1. 「略式コマンド」にP00950と入力してセキュリティ・ワークベンチを開きます。
2. 「フォーム」メニューから、「Webオブジェクト・セキュリティ」、「Webオブジェクト・ビュー」の順に選択します。
3. 「追加」を選択します。
4. 「Webオブジェクト表示セキュリティ」フォームで、「カテゴリ」フィールドにONEVIEWと入力します。

5. 「サブカテゴリ」フィールドにWATCHLISTと入力します。
6. 「アプリケーション」フィールドにアプリケーション、「ユーザー/ロール」フィールドにユーザーまたはロールを入力することもできます。
7. 次のグリッド・カラムに入力します。

グリッド・カラム	値
ユーザー/ロール	セキュリティを設定するユーザーまたはロールを入力するか、*PUBLICと入力します
アプリケーション名	必要な場合はアプリケーション名を入力します。
フォーム名	必要な場合はフォーム名を入力します。
バージョン	必要な場合はアプリケーションのバージョンを入力します。
Webオブジェクト名	必要な場合はOne Viewウォッチリスト名を入力します。
製品コード	必要な場合は製品コードを入力します。
ビュー	ユーザーが共有ウォッチリストを表示できるようにするには、「ビュー」カラムを選択します。選択すると、このカラムに緑色の四角が表示されます。

重要:

新しいレコードを設定しても、ユーザーにウォッチリストの表示アクセス権が付与されない場合、そのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneを一度サインアウトして再度サインインするか、Server ManagerにアクセスしてJDBjセキュリティ・キャッシュをクリアする必要があります。

5.3. ウォッチリスト操作セキュリティの設定

ウォッチリスト操作セキュリティを設定するには、次のようにします。

1. 「略式コマンド」にP00950と入力してセキュリティ・ワークベンチを開きます。
2. 「フォーム」メニューから、「Webオブジェクト・セキュリティ」、「Webオブジェクト操作」の順に選択します。
3. 「追加」を選択します。
4. 「Webオブジェクト操作セキュリティ」フォームで、「カテゴリ」フィールドにONEVIEWと入力します。
5. 「サブカテゴリ」フィールドにWATCHLISTと入力します。
6. 「アプリケーション」フィールドにアプリケーション、「ユーザー/ロール」フィールドにユーザーまたはロールを入力することもできます。
7. 次のグリッド・カラムに入力します。

グリッド・カラム	値
ユーザー/ロール	アクセス権を付与するユーザーまたはロールを入力するか、*PUBLICと入力します。
アプリケーション名	必要な場合はアプリケーション名を入力します。
フォーム名	必要な場合はフォーム名を入力します。
バージョン	必要な場合はアプリケーションのバージョンを入力します。
製品コード	必要な場合は製品コードを入力します。

グリッド・カラム	値
作成	ユーザーが個人ウォッチリストを作成できるようにするには、「作成」カラムを選択します。選択すると、このカラムに緑色の丸が表示されます。
共有	ユーザーが共有ウォッチリストを共有、予約および更新できるようにするには、「共有」カラムを選択します。選択すると、このカラムに緑色の丸が表示されます。
アクセス・レベル	付与するアクセス権のタイプに応じて、ドロップダウン・メニューから値を選択します。「作成」または「共有」カラムを選択すると、この値が自動的に移入されます。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

重要:

新しいレコードを設定しても、ユーザーにウォッチリストの作成または供給アクセス権が付与されない場合、そのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneを一度サインアウトして再度サインインするか、Server ManagerにアクセスしてJDBjセキュリティ・キャッシュをクリアする必要があります。

One Viewウォッチリストの管理タスク

この章の内容は次のとおりです。

- [53 ページのトラブルシューティング](#)
- [55 ページのパフォーマンスに関する考慮事項](#)

6.1. トラブルシューティング

この項では、発生する可能性のある問題と考えられる解決策について説明します。

6.1.1. ウォッチリストが実行されない

WebSphere Application Serverを使用中で、JD Edwards EnterpriseOneを連携またはクラスタ化されたWebサーバーの構成要素として実行している場合、最新のToolsリリースのデプロイ後にWebSphereグローバル・プラグイン構成の再生成が必要になる場合があります。これは、新規サーバーレットがデプロイ中のToolsリリースに追加されている場合は必須です。

WebSphereグローバル・プラグインを再生成するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server(WAS)コンソールを開きます。
2. 「環境」ツリー構造を開きます。
3. 「グローバルWebサーバー・プラグイン構成の更新」オプションを選択します。

図6.1 グローバル・プラグイン構成の更新



4. 「OK」をクリックして、新規プラグインを生成します。
5. 新規ファイルの認識のためにHTTPサーバーを再起動します。

6.1.2. 「更新に失敗しました - クエリーが見つかりません」エラー

このエラーは、システムがウォッチリストの更新を試行するときに表示される場合があります。これは、ウォッチリストの基準になるクエリーが削除されている場合、またはユーザーにクエリーへのアクセス権がない場合に発生します。たとえば、ユーザーが属していない特定のロールに対してクエリーが設定される場合があります。

問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. クエリーがまだ存在していることを確認します。
2. P00950でアプリケーション・クエリーのセキュリティをチェックして、クエリーを表示する権限がユーザーにあることを確認します。

6.1.3. ユーザーにウォッチリストへのアクセス権がない

Webオブジェクト表示セキュリティまたはWebオブジェクト操作セキュリティをユーザーに対して設定し、JD Edwards EnterpriseOneをサインアウトしてから戻った後、そのユーザーにウォッチリストへのアクセス権がまだない場合は、セキュリティ・キャッシュをクリアする必要があります。Server Managerに移動し、JDBjセキュリティ・キャッシュをクリアすると、問題を解決できます。

6.2. パフォーマンスに関する考慮事項

ウォッチリストは、Webサーバーの負荷を軽減する目的で設計されています。クエリーによるウォッチリストの実行は、同じ情報を得るために関連付けられたアプリケーションを開くよりも、必要なオーバーヘッドが少なくなります。アプリケーションを開かずに、ユーザーが必要な情報を「ウォッチリスト」メニューから取得できれば、実質的に、Webサーバーの負荷減少して生産性が向上します。

ウォッチリストのリフレッシュ間隔を5分に定義しても、ウォッチリストが5分ごとに実行されるわけではありません。ユーザー・アクション（「ウォッチリスト」ドロップダウン・メニューをクリックするなど）が実行されると、更新の必要性を確認するため、ウォッチリストがリフレッシュ間隔を確認します。つまり、ユーザー・アクションが実行されなければ、ウォッチリストは実行されません。

ユーザーが設定するウォッチリストが、Webサーバーのパフォーマンスに悪影響を及ぼさないようにするための構成設定がいくつかあります。この設定は、「Webオブジェクト設定」見出しの下にあるServer Managerの「Webランタイム」セクションにあります。

Webオブジェクト設定	値
ウォッチリスト: 返されるデフォルト最大レコード数	「ウォッチリストの管理」タブで「返される最大レコード数」フィールドのデフォルト値を指定します。これは、ウォッチリストの作成時に使用されます。
ウォッチリスト: 返される上限最大レコード数	ウォッチリストの「返される最大レコード数」フィールドにユーザーが入力できる最大値を指定します。ユーザーがウォッチリストの作成または編集時にこれを超える値を設定すると、エラーが返されます。
ウォッチリスト: デフォルト・リフレッシュ間隔	「ウォッチリストの管理」タブで「リフレッシュ間隔」フィールドのデフォルト値(分)を指定します。これは、ウォッチリストの作成時に使用されます。
ウォッチリスト: 下限リフレッシュ間隔	ウォッチリストの「リフレッシュ間隔」フィールドにユーザーが入力できる最小値(分)を指定します。
ウォッチリスト: スレッド数	同時に更新できるウォッチリストのユーザーごとの最大数を指定します。

ウォッチリストの作成の詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Watchlists Implementation Guide』を参照してください。

用語集

レポート定義	One ViewレポートについてのJD Edwards EnterpriseOneメタデータ。レポート定義には、データ・モデル内で選択されているカラム、命名規則、ロー・セット設定およびレポート名についての情報が含まれています。
共有レポート	セキュリティ設定で制限されていないかぎり、システム全体で使用できるOne Viewレポート。ユーザーが共有レポートを直接変更することはできません。共有レポートは、パワー・ユーザーが個人用レポートからプロモートする必要があります。
個人用レポート	ユーザーの個人用フォルダ内にあり、そのユーザーが所有しているOne Viewレポート。
BI Publisherデータ・モデル	BI Publisherがレポートのデータを取り込み、構築するための指示セットを含むオブジェクト。データ・モデルは、カタログ内に個別のオブジェクトとして存在します。これには、サンプル・グリッド・データ、フォーム・レベル情報およびデータ・ソースへの参照が含まれます。
BI Publisherレイアウト	テンプレート・ファイルと、レポートへのデータの表示方法が定義された、テンプレート・ファイルのレンダリングに関する一連のプロパティ。BI Publisherは、Microsoft Word、Adobe Reader、Microsoft Excel、Adobe Flash、BI Publisher独自のレイアウト・エディタなど、各種ソースから作成されたテンプレートをサポートしています。1つのレポートに複数のレイアウトを含めることができます。
BI Publisherレイアウト・エディタ	すべてのBI Publisherレイアウトの設計に使用できるWebアプリケーション。
BI Publisherレポート	BI Publisherデータ・モデル、BI Publisherレイアウト、プロパティおよび翻訳の参照からなるレポート。
One Viewウォッチリスト	ユーザー定義基準に一致し、ユーザーが警告対象に選択した情報が含まれるアイテムのコレクション。
One Viewレポート	JD Edwards EnterpriseOneレポート定義とBI Publisherデータ・モデルおよびレポートを含む統合レポート。

索引

あ

アクセス制御

設定, 27

ウォッチリスト

Webオブジェクト設定, 55

クエリーが見つかりません, 54

更新に失敗しました, 54

実行されていない, 53

トラブルシューティング, 53

パフォーマンスに関する考慮事項, 55

ウォッチリスト・セキュリティの概要, 49

ウォッチリスト操作セキュリティ, 50

ウォッチリスト表示セキュリティ, 49

か

機能権限

設定, 27

構成設定, 30

さ

最大レコード件数, 30

ソフトコード・レコード

作成, 25

た

デフォルト・レコード件数, 30

ら

ランタイム機能権限アプリケーション, 27

ランタイム機能定義, 26

B

BI Publisherソフトコード・テンプレート, 21

BI Publisherユーザー

構成, 19

BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOne

ユーザーのマッピング, 28

BI Publisher用のボイラープレート

インストール, 17

BI Authorロール, 18

G

GH9115メニュー, 33

O

One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコード

概要, 23

作成, 25

One View Reporting BI Publisherのソフトコード・テンプレ

レート, 21

One View Reporting BI Publisherのソフトコード・レコード, 23

One View Reporting

概要, 12

利点, 12

One Viewレポート

アプリケーション・リスト, 33

インストール, 29

インポート, 36

エクスポート, 35

概要, 20, 33

管理, 20

クエリー, 34

削除, 35

転送, 37

表示, 34

プロモーション履歴の確認, 35

プロモート, 34

メニュー, 33

One Viewレポートのインポート, 36

One Viewレポートのインポート・アプリケーション, 36

One Viewレポートのエクスポート・アプリケーション, 35

One Viewレポートの削除, 35

One Viewレポートの処理アプリケーション, 34

One Viewレポートの転送アプリケーション, 37

One Viewレポートのプロモーション履歴, 35

Oracle BI Publisher

インストール, 15

インストールの概要, 13

概要, 11

ユーザーの移行, 17

P

P952400, 34

P958974, 27

P982402, 35, 36

P982403, 37
